

私はアパルトマンの扉を開けた。外から冷たい空気が入ってきた。マフラーを締めなおすと、曇天の外に出た。

「お早う」

「お早うお嬢さん」

よく顔を合わす、近所のおじさんと挨拶をした。

坂道をどンドン下がっていった。私の学校は海の近くの大通りに面している。そこまでいつも私は歩いていく。

「寒い」

私は自分の指に息を吹きかけた。今日は手袋を持ってくるのを忘れた。手をコートの中のポケットにいれた。

すぐ横を自転車に乗った男の人が通りすぎていった。坂道なのですぐに姿が見えなくなつた。

「自転車っていいな」

けれど、私の学校は自転車が禁止されている。みんな送り迎えの車か、徒歩でいくしかない。

「お早う」

「お早う」

後ろから友達が声をかけた。

近くに住むミーシャだった。ミーシャはおばあちゃんとお父さんの三人で暮らしている。

「いい天気ね」

ミーシャは言った。

「ええ、本当」

ミーシャにとってはいつもいい天気だった。

雨の日でも。

「お早うございます、シスター」

「お早うございます、皆さん」

学校の前の通りでシスターに合った。シスター達は、学校の隣の教会に住んでいて、いつ

も学校と教会を行き来している。

学校につくと、いつもと同じように授業が始まった。

歴史の先生が中世の歴史について説明している。その抑揚のない話し方がかえって心を歴史から遠ざける。私は窓から外を見ていた。だんだん暗くなってきた。

「エメラルド、聞いているのか？」

歴史の先生が言った。背広を着て、いつも同じ紫のネクタイを締めている。

「はい、すみません」

「どうも集中力に欠けるようだな。どうかね、教室の後ろに立っているというのは」

先生は生徒を立たせるのが好きだ。その方が授業に集中できると思っっているようだった。私が立たされるのはこれが始めてではない。

「はい」

私は教科書を持つと黙って教室の後ろにいった。

ミーシャが振り返って私の方を見た。なぐさめているような目だった。

『別にいいのよ、全然気にしてないから』

私は目でそう答えた。

また先生が机に座ったまま、歴史の講釈を始めた。他の生徒達も聞いているのかどうかわからない。

学校から帰る時間になった。私達は、学校の玄関に立っていたシスターに別れの挨拶をした。

校門のすぐ前には車が何台か止まっていた。

立派な車ばかりだ。

私達のすぐ後ろから、一人の生徒が出てきた。

「あははは」

シスターに挨拶もせず、大きな足音を立てて、走って車まで行った。

車から運転手が出てきて、その子の為に後部座席のドアを開けた。あたり前のように、その座席にその子は滑りこんだ。

私達の学校は私立のカトリックの学校だった。だから、大きくわけて二種類の生徒がいる。家がお金持ちで、あたり前のようにこの学校に通っている子。

それから、ミーシャや私みたいに、親が学費をなんとか工面して、子どもをこの学校にやっていると。

当然の事ながら、この二つのグループは仲良くなれない。別に対立している訳でも、いがみ合っている訳でもない。ただ、自然と水と油のようにバラバラになってしまう。

私達の目の前で車が発進していった。そして、また別の車が校門のまん前にやってくる。

私達は車の横を通りすぎて、歩きだした。

帰り道はずっと坂道だった。

「今日、私の家で一緒に宿題しない？」

ミーシャが言った。

「いいけど、一度家に帰って着替えるわ」

「勿論そうして」

私達の学校は制服だった。だから制服を着たままだと、いったいどの生徒だかすぐにわかってしまう。それが嫌だった。

「いよいよ降ってきたね」

「本当」

「急ごう」

私達は坂道を走った。こんな時に、お迎えの運転手がいたらいいのに、いつも思う。

私達の横を自転車が通りすぎた。細いタイヤで、坂道をもともせずに登っていく。それで、下りよりはずっと速度が遅い。通りすがりに、その人が私達を横目で見ていったような気がした。

「それじゃあ、またあとで」

「あとでね」

別れ道で手を振った。

そのまま坂道を登ると、自分のアパートマンのある建物の扉をあけた。

「ただいま、ママ」

「おかえりエメラルド」

玄関を開けると、ママはいつものようにソファーに座っていた。

「ふう」

しんどそうに息を吐いた。ママは今、四十五歳だ。パパと別れてから、ずっとソファーに座り続けている。そして体には少しずつ肉が増え続けている。

ママには悪いけど、パパが若い女の人を好きになる気持ちもわかる。

部屋に入って着替えをした。ストッキングを履いて、ワンピースを着た。その上から短いジャケットをはおった。

「ミーシャの家に行ってくる」

私は宿題を入れた布の袋を持つと、ソファーに座ったままのママに言った。

「あんた、その格好は何？それじゃ寒いじゃないか。もう冬だっていうのに」

「寒くなんかない」

「何、強がり言っているんだい」

「本当だもん。じゃあ」

「晩ごはんまでには帰ってくるね」

「帰るわ」

私は家を出ようとして、雨が降り出した事を思いだした。玄関先にある傘を持った。

ママに一言言おうと思ってやめた。今、ママと話す疲れそうだから。

階段を下りて、入り口まで来た。扉を開けると、さっきよりは随分雨がひどくなっていた。私は傘を広げて。それでも走って外に出た。首のあたりに風が吹いてとても寒い。マフラーをしてくれれば良かった。

けれど、マフラーは学校の制服用のマフラーだったから、それを私服にするのは嫌だった。私のすぐ後ろでクラクションが鳴った。立ち止まってみると、サングラスをかけた男の人が車に乗っていた。

「お嬢さん、良かったら送りますよ」

その人は見た事のない人だった。

「いいえ、ありがとうございます。すぐ近くの友達の家に行くだけですから」

男の人は軽く手を挙げると、そのまま車ごとどこかに行ってしまった。

私は水しぶきの中に残る車のヘッドランプを見送ると、またミーシャの家へと急いだ。ミーシャの家も私のと同じようなアパートマンだった。違うのは、いつも優しいおばあちゃんが私を迎えてくれる事。お父さんは仕事でいない。

「いらしゃいエメラルド」

玄関まで来ると、ミーシャは私の手をとって、自分の部屋まで引っ張った。

「いらっしゃいエメラルド」

キッチンにいたおばあさんも私に声を掛けた。私は笑顔でおばあさんに答えた。

「おばあちゃん、紅茶をお願いね」

「わかったよ」

私達はミーシャの部屋に入った。

「いいの？おばあちゃんに頼んでばかりで」

「いいのよ。他にする事がないんだから」

「そう」

私は少し雨で濡れたカバンから、今日の宿題を取り出して、ベッドの上に広げた。いつも二人でベッドの上に寝転がりながら、宿題をしていた。

しかし、ミーシャは私の事を見ていなかった。

「ねえ、これ見て」

ミーシャは自分の小さな机の引き出しから、ピンク色の封筒を取り出した。

「何、これ？」

「ラブレター」

「ラブレター？」

私は封筒を受け取った。

「見ていいの？」

ミーシャは大きく頷いた。

それはまだ封がなされていなかった。私は中身をそつと取り出した。

「親愛なる茶色いコートのあなた様へ、毎朝お目にかかれるのを嬉しく思っています。愛をこめてミーシャより」

「これだけ？」

「そう、これだけよ」

「いったいこの茶色いコートのあなた様って誰？」

「名前さえ知らないのよ、実は。でも、朝、学校に出かける時に、殆ど毎日顔を合わせるの」

「じゃあ、大学生かしら」

「多分ね」

「これ、渡すつもりなの？」

私は聞いた。

「うん。出来たら。どう思うエメラルド？」

ミーシャはベッドの上に座ると足を投げ出した。ジーンズを履いていた。

「でも相手は大学生なんでしょう？」

「それが？」

「ううん、別に何でもない」

「どうやって渡したらいいのかしら。これを渡したら、彼、どう思うかしら？デートに誘ってくれるかしら？」

「さあ」

私は会った事もなければ、顔を見た事もないので、何とも言えなかった。

「冷たいのね。がんばってとか、幸運を祈るわ、とか言ってくれないの？」

私は返事をしなかった。

「そうゆうクールな所があなたのいい所なのよね」

「別にクールじゃないけど」

「ううん、クールよ。でなければ大人って言うのかしら。私もあなたみたいに早く大人になりたい」

「そう？」

「お茶が入りましたよ」

おばあちゃんが、ポットに入れたお茶と、マグカップと、小さなケーキを持ってきてくれた。

「わあ、おいしそう、ありがとうおばあちゃん」

ミーシャは封筒を後ろに隠しながらそう言った。

「ありがとうございます」

私も言った。

ミーシャの家を出ると、外はもう暗かった。宿題をするのが随分遅くなってしまったので、帰るのも遅くなってしまった。

「ママ、怒っているかしら」

雨はますます激しくなっていた。

カバンを濡らさないように、自分の前の方にずらした。

「やあ」

雨の中、後ろから男の人の声が聞こえた。

同じように傘を持った男の人が近寄って、私の目を覗きこんだ。

「きみ、海の近くの女子高に通っているんだろう」

「はい」

私もその人の目を見た。でも、知っている人には見えなかった。

「ごめん、僕の名前はルネ。いつもは自転車で君の横を通りすぎているんだ」

「ごめんなさい。全然気がつきなかったわ」

「当然さ。ところで君の名前は何？」

「エメラルド」

「エメラルドか。きれいな名前だね。さあ、家まで送るよ」

「ありがとう」

私たちは激しい雨の中を歩き始めた。雨はいつこうにやむ気配はなく、服もカバンもぐしょ濡れだった。

私の家の前まで来た。

「ありがとう。私、ここに住んでいるんです」

「そう。ご両親と住んでいるの？」

「あの、母と二人で暮らしています」

「そう。じゃあ、お母さんによろしく」

「はい」

「じゃあ」

「さようなら」

「さようなら」

私は彼の姿を見送らずそのまま扉を固く閉めると、階段を駆け上がった。

家のドアを空けると、中は真っ暗だった。

「ママ、ママ、出かけてるの？」

私は電気をつけた。いつものソファの所にはママはいなかった。夕食までには帰ってくるように言ったのはママなのに。

台所から物音が聞こえた。私は台所の電気をつけた。

「ママ、いったいどうしたの？」

空気にお酒の匂いがたちこめていた。

「ママったら」

ママはテーブルの上に突っ伏して寝ていた。

そして、ブランデーの空き瓶とグラスもあった。

「いったい何があったの？」

私が出た時にも、しんどそうだったけど、こんなではなかった。

「郵便が届いたんだよ」

ママは突っ伏しながらも、手に持っていた白い封筒を私に見せた。

「見てもいいの？」

「いいとも。お前の名前もあて先に書いてあるから」

私は封筒の表を見た。ママと私の二人宛になっていた。

「これ、結婚式の招待状じゃない。いよいよパパも結婚するのね」

「そうみたいだね」

私はママを見た。

「どうしたの、ママ。もうパパの事は好きじゃないって言っていたじゃない。本当はまだ好きだったの？それだったら、そう言ったら良かったじゃない」

「男の人はいいかもしれない。けど、女には潮時つてのがあるんだよ」

「潮時？」

「そうだよ。男はいつだって若い女がいいんだから」

「そんな事ないわよ。年がいついても、再婚する人だっていくらでもいるじゃない。ママだって、もうちょっと痩せて、若々しくしたら、いくらでも男の人がいるんじゃない？」

「痩せていなくて悪かったね」

急にママが顔を上げた。

「あんたはいいね、肌にしミ一つなくて。キレイなサラサラな髪の毛で、おまけにカモシカのような手足をしているときている」

ママが私の髪の毛を触った。お酒に酔っ払っているせいか、目付きが不気味だった。

私は一歩後ろに下がった。そのままにしていたら、ママが私の髪の毛を引っ抜いて自分の髪の毛と交換してしまうのではないかとさえ思えた。

それが不可能だとわかっていても。

「ママ、晩ごはんは？」

私は台所を改めてみた。食べ物の気配は全くなかった。

「じゃあ、私がおつかいするから、ソファで休んでいて」
急におとなしくなったママは頷いて一人でソファに横たわった。

鍋に水を入れ、火にかけると、冷蔵庫から野菜と取り出した。とにかくある物を全部入れて、野菜スープを作ろう。

「ママ、スープが出来たよ」

しかし、ママは寝息を立ててそこで寝ていた。その寝姿に少し、何か動物的な物を感じて、嫌悪感を抱いた。自分はママみたいになりたくない、そう言ったら、ママは怒るにきまっているけれど。

私はポウルにスープを注ぐと、胡椒を振りかけ、一人で飲んだ。カバンから今日やった宿題を取り出した。しめっていて、ノート全体がよれよれになっていた。

次の日の朝は、お天気だった。

「お早う」

「お早う」

「いいお天気ね」

ミーシャが元気な声で言った。

「本当ね。今日はいいお天気だわ」

「いい気分」

ミーシャが突然走って坂道を下り始めた。

「どうしたの、そんなに急いで」

「どうもしない」

下の方でミーシャが叫んだ。

「お早うエメラルド」

急に耳元で男の人の声が聞こえた。

「お早うございます」

振り返ると、自転車に乗った男に人がすぐ側に立っていた。

「これからはルネって呼んで欲しいな」

今日は自転車用の服装をしていたのでわかりにくかったけれど、目は、きのう雨の中で会った男の人だった。

「そう言えば、お母さんによろしくって言われてんだった」

特にそうしなくてはならない理由もない。それに、きのうはそれどころではなかった。

「君の友達は大嫌いだね。いつもあんな風なの？」

「ええ、まあ」

「そう幸せだね」

「はい」

「そして君も。幸せだね」

最後はちよつと質問のようにも聞こえた。

「はい」

「それじゃあ」

それだけ言うと、彼は私の返事を待たずに坂を自転車で下がっていった。

「エメラルド！」

下でミーシャが叫んでいた。

「ごめん、今行く」

私があわてて下まで行くと、彼女が待っていた。

「今、誰かと話していなかった？」

「あ、うん」

「いつから知り合いなの？」

「きのう。ううん、正確にはもっと前から。前からこの道を自転車で通りすぎていたんだって」

「そう言われてみれば、そうかもね」

納得したような顔をした。

「それにしても、あなただけずるいわ。いつの間にかボーイフレンドを作っているなんて」

「ボーイフレンドじゃないって。それより、きのうのラブレターどうしたの？今朝渡せたの？」

「ううん。今朝は会わなかったわ。でも、きつと近いうちに渡せると思うの。そしたら、彼は私をデートに誘ってくれるわ。いったい何所に連れていつてくれるのかしら」

彼女の目は期待でいっぱいだった。

「それで、朝から幸せな気分なんだ」

そう心の中で思った。

学校の前まで来ると、黒塗りの車が急スピードでやって来て、校門の前で止まった。

運転手が席を降りて、後部座席のドアを開ける前に、生徒が自分でドアをあけて出ていった。私たちのクラスの女の子だった。黒い長い髪の毛が後ろにたなびいていた。

運転手は帽子を取って軽く挨拶をしたけれども、その子は見ていなかった。

学校の入り口の前で、私たちの前で立ち止まると、私たちが中に入る為に道をあけた。

「入らないのかしら」

その子は少しの時間、私たちの事を見ているようだった。

「アナイス、入らないの？」

ミーシャが大きい声で言った。

その子は、アナイスは、こちらを少しだけ見ると、顔をそむけてしまった。

「ミーシャ、ダメよ。目が赤かったわ。話しかけて欲しくないのよ」

「そうだったの、ごめんさい」

アナイスには聞こえない位の小さな声でミーシャは言った。

教室に入ると、ミーシャはまた、茶色いコートの人で頭がいっぱいだった。

授業中はずっとノートに何かを描いていた。

「いったい何を描いているの？」

化学の授業の後に私はミーシャのノートを見せてもらった。それには、化学式ではなくて、ハートの絵が沢山描かれていた。

「全然授業を聞いていないでしょう？」

「わかった？でも、どうせ聞いても全然わからないからいいのよ」

「そうなの？」

私は視線を感じて振り返った。アナイスだった。アナイスがじっと私の事を見ていた。

いつものお嬢さん友達とは一緒にいずに、自分の席に座っていた。

私が彼女の目を見ると、彼女は、また目をそむけた。

「ミーシャ、いったい何を考えているんだ？ボーイフレンドの事でも考えているのか？」

歴史の時間に例の紫のネクタイをした先生が怒鳴った。

「すみません、先生」

ミーシャは真っ赤になった。

「教室の後ろに立って、しっかり私の話を聞きなさい。それから授業の後に私の所まで来

るように」

「はい」

ミーシャは小さな声で答えると、教科書を持って教室の後ろに向かった。私は彼女の顔を見上げた。

彼女は私の顔を見て小さく頷いた。

歴史の授業の後、ミーシャは先生について、教室を出ていった。

「エメラルド、ちょっと話があるんだけど、いいかしら？」

アナイスが私の机にやって来て言った。長い黒髪が私の前でまた揺れた。

「ええ」

私たちは学校の中庭に行った。

もう寒い時期なので、他に誰も人がいなかった。

中庭にある陶器のベンチに座った。冷たさが服を通りこして伝わってきた。私は両腕を両手で覆った。

「どうしたの？」

私はアナイスの茶色い目を覗き込んだ。

アナイスはそれには気がつかないように、中庭の真ん中にある葉の落ちた木を見ていた。

「お願いがあるの？」

「何？」

「今度の土曜日、付き合ってくれないかしら？土曜日あいてる？」

「ええ、あいているけど？」

土曜日はママと一緒にスーパーマーケットに行く事になっている。でも、それは、いつでも良かった。

「良かった。クリニックに付き合って欲しいのよ」

「クリニック？」

「そう」

何だかそれ以上聞くのは良くないような気がして黙っていた。

「でも、何で私に？」

アナイスには友達が沢山いた筈だった。

「ううん。あなたと一緒に来て欲しいの。あなただったら、他の人に話したりしないでしょ？」

「それはないと思うけど・・・」

「そうだと思った」

彼女は私の目を見た。その目は絶対に人に言わないで、と訴えかけているように見えた。

「それから、」

「それから？」

「ううん、またあとでお誘いするわ」

そう言うと彼女は立ち上がった。もう、次の授業が始まる時間だった。

「私の車に乗っていかない？」

アナイスは私に言った。ミーシャは今日は、歴史の先生の所で書類の整理を手伝っている。

「でも」

「遠慮しないで。どうせ帰り道だから」

「ええ」

私はアナイスの車に乗った。ママは車を持っていないので、私にとっては物珍しかった。運転手は何も言わないで車を発進させた。

「家はどこ？」

「この坂のずっと上の方」

「そう」

「アナイスの家は？」

「私の家は東の方よ」

「じゃあ、反対側」

「あんまりかわらないわ」

「そうかも」

車だったら、それ程かわらないに違いなかった。私は窓から外を見た。学校ははるか下の方になって、小さい家々が立ち並んでいた。

町は、学校のある通りを境にして、お金持ちの人たちが住む地域と、そうでない人たちが住む地域に分かれていた。

ミーシャや私は勿論、お金持ちでない人たちが住む所にいた。そして、アナイスは、今日聞くのが始めてだったけれど、お金持ちの人達が住む所に住んでいた。

自分の住んでいる所を教えるのが恥ずかしい。そんな風に少しだけ思ったけれど、思っ

も仕方がない。ママと二人で小さなアパートマンに住んでいる。それが私なのだから。

「まだ先なのかしら？」

アナイスが聞いた。

「そう。でも、もうすぐ」

長い坂道も車だとすぐだった。

「ねえ、エメラルド、もし良かったから、これから私の家に来ない？」

「あなたの家に？」

「そう」

正直言って、お金持ちのお友達の家招待されるのは初めてだった。いつも、ミーシャやその他、町のこちら側に住む友達としか仲良くしてこなかった。

「いやかしら？」

「そんな事ないわ。ありがとう」

「そう良かった。じゃあ、私、車で待っているから、あなたのママにそう言ってきて」

「わかった」

私は自分の家の建物の前で降りると、急いで階段を上がった。

ママはいつもと同じように、居間のソファアに座っていた。

「ママ、これから友達の家に行くから」

「またかい？」

「ええ」

私は自分の部屋に入って大急ぎで着替えた。きのう着ていたのと同じ服だ。

「晩御飯までには帰ってくるんだよ」

昨日と同じ事をママは言った。でも、それは元気になった証拠だった。もうお酒は飲んでいなかった。

「わかってるわよ」

そう言うと、階段をかけ降りた。ママは私がミーシャの家に行くと思っているに決まっている。でも、わざと何も言わなかった。説明するのが大変そうだから。

「お待たせ」

運転手が私の為に後部座席のドアを開けてくれた。こんな事してもらったのは、生まれて初めてだった。

「ありがとう」

私は運転手の目を見て言った。

「どういたしまして」

運転手の目は優しくそうだった。

「家まで」

アナイスは冷たい声で後ろから言った。運転手は何も言わずに軽く頷いた。

車が坂を下りると、だんだんに大きい家が見えてきた。

「きれいな家ばかりね」

私は彼女の横顔を見た。しかし、返事はなかった。もっと別の事を考えているようだった。車はある邸宅の前で止まった。それは思っていたよりは大きくはなかったが、それでも、私のアパルトマンとは比べようがなかった。

車が家の前まで着いた。

「お嬢様、お帰りなさいませ」

中からメイドが出てきた。

「私、生まれて初めて本物のメイドって見たら」

出来るだけ小さい声で言った。

挨拶したのは異国風の顔立ちの私たちとあまり年齢の変わらなさそうな女の子だった。

「そう。こっちよ」

アナイスは手招きした。

アナイスの部屋は階段を上がってすぐの所にあった。

「中に入って」

机とテーブルと、引き出しと、部屋の中にある物自体は私たちの部屋と何ら変わらなかった。ただ、部屋は随分と広がった。

「座ってもいい？」

アナイスは頷いた。

ミーシャの家でいつもしているように、私はベッドの上に腰を下ろした。

「お父さん、お母さんは？」

「いるわ。ちゃんと生きている」

「でも、家にはいないの？」

「仕事よ。二人共」

「そう」

私は立ち上がったって、引き出しの上にある写真を見た。

「これがああなたのご両親？」

「そう」

アナイスは私のすぐ隣に来た。写真には若い両親と小さい頃のアナイスが写っていた。

「素敵なお両親ね」

「ありがとう」

「私にはパパはいないの」

「いないって？」

アナイスは私の顔を見た。

「いるけど、今は別に暮らしているの。今度結婚するわ。別の女の人と」

「そう、男の人ってずるいわね」

何となく彼女の言葉にある種の重みがあった。

「ねえ、アナイス、何か私にいい事があるのかしら？」

私はできるだけ普通に話した。きっと、強く彼女に迫ったりしたら、彼女は話すのをやめてしまうだろうから。

「お嬢様、お茶をお持ちしました」

さっきのメイドだった。

大きなポットにティーコゼがかぶせられ、美しいカップも一緒にトレイに乗せられていた。

「ママ、そんなに変わらないって」

今朝は天気良かったので、屋外のマーケットにママと一緒に来た。アナイスとの約束の時間には充分時間があると思っていた。でも、ママは何を買うのも、ものすごく時間をかける。まるで、野菜一つ買うのでも、全部の野菜を触ってみたいと納得できないみたいだった。

ママがそんな風なのは前から知っていたけど、今日は特にひどいように思えた。

「ねえ、ママってば。いい加減にしてよ。友達と約束があるんだから」

「ちよっとぐらい遅れたっていいじゃない。ママともう少し時間を費やしてくれたっていいと思うよ」

「でも、今日はクリニックに行かなくてはいけないのよ。予約しているの」

「クリニック？」

野菜から手を離すと、ママが顔を上げた。

「ううん、何でもないの」

つい口がすべってしまったのを後悔した。

「あんた、どこが悪いの？」

「ううん、私じゃないの」

「ミーシャかい？」

「ううん、ミーシャでもないの。別の友達」

「そうかい。それだったらいいけど」

「ミーシャじゃなかったらいいのかしら」

心の中で思ったけど、それは言わなかった。

ママは、隣の所の野菜をまた触りはじめたけど、また、顔を上げた。

「本当にあんたじゃないんだね」

「本当に違うわ。みてよ。私、こんなに元気じゃない」

ママはじっと私を見た。そして小さいため息をついた。

「確かに、あんたは元気そうだね」

「そうでしょう。ごめんさい、ママ、本当にもういかなきゃ。荷物持てなくてごめんさい」

私はママの返事を待たずに駆け出した。少し離れてから、振り返った。相変わらず、野菜を見ているママの小太りの体が見えた。

私はまた走り始めた。ほどけそうになるマフラーを押さえながら。

アナイスはクリニックのある建物の前で待っていた。道に落ちているゴミを蹴飛ばしていた。

「ごめん、遅くなって。運転手は？」

「今日は一人で来たの」

「そう。それでよかったの？ご両親には何って言ったの？」

「別に何も言っていないわ。一人で出かけた時は、出かけるって言えばそれでお願いします」

「そうなんだ」

何となく不思議だった。私のママも、あまり突っ込んで私の行き先を聞く方ではないけれど、それでも、一応、どこに行くかを言わないと許してくれないような所がある。

「あなたが具合が悪いつて事、言っておいた方がいいんじゃないの？」

私は改めて彼女を見た。でも、外から見た限りはどこも悪そうに見えなかった。

「いいのよ、どうせわかってくれないから」

私たちはクリニックに入った。

中は、病院というよりは、豪華なオフィスのように見えた。こんなクリニックに入るの私は始めてだった。

「こんにちは」

眼鏡をかけた受付の女の人が私たちに笑顔で言った。

「こんにちは。予約をしてあるんですけど」

「勿論です」

そう言うと、女の人は私を見た。

「この人は友達です。今日不安だから一緒に来て貰ったんです」

「そうですか」

納得したように女の人は頷いた。

豪華な待合室で私はアナイスが出てくるのを待っていた。もう一時間以上たっている。私は置いてあったファッション雑誌を殆ど見終わっていた。

受付の人は忙しそうに、ずっと書類をめくっている。

待つのはいやではなかった。きっと彼女は私にここで彼女が出るのをいまかいまかと待っていて欲しいだろう、というのがわかっていたから。

いったい中でどんな事が行われているのか、私にはさっぱり見当がつかなかった。

私は雑誌を閉じると、窓の方に行つて。窓にはレースのカーテンがかかっていた。そのカーテンを少し開けると、下の通りが見えた。

車や、舗道を歩く人たちが沢山見えた。もう、お昼の時間は過ぎていた。お腹は空いていたけれども、空いていなかった。ここにいると、自分の感覚が麻痺してしまうようだった。受付の人の視線を感じた。あまり、レースのカーテンに触って欲しくないのだろうか。もしかすると、その人のお気に入りカーテンなのかもしれない。

カーテンを直すと、私はまた長いすに座った。

それからしばらくしてアナイスは出てきた。

随分青ざめた、いえ、灰色と言つてもいい位の顔色をしていた。

「大丈夫？」

私の隣に座った彼女に私は言った。

何もいわずに彼女は頷いた。そして、しばらく肩で息をしていた。

少し立ってから、ようやく元気になったようで、彼女は立ち上がった。

「帰ろう」

「ええ」

私たちはクリニックの戸を押しした。

「さようなら」

「さようなら」

受付の人は眼鏡を直しながら、言った。

「今日はありがとう。一緒にいてくれてとても心強かった」

「別に何もしなかったけど」

「それでもありがとう」

「どういたしまして」

「私、家に帰る」

そう言うと、アナイスはそのまま歩き始めた。

「大丈夫？家まで送っていかなくていいのかしら？」

「大丈夫よ」

そう言って、振り返らずに彼女は手を振った。

「そっか」

急に自分はお腹が空いている事に気がついた。近くにあるハンバーガーショップを探して、そこに入った。

中は人でいっぱいだった。自分と同じ位の年頃の人もいた。中には、違うクラスの女の子達もいた。しかし、わざと私は遠くの席に座った。そこから彼女達がおしゃべりしているのが見えた。

けれど、私は一人でハンバーガーを食べていた。そして、アナイスは一人で歩いて家に帰ったのだった。いつもは運転手に送り迎えしてもらえるのに。

家に帰ると、いつものソファでママが座ってカタログを見ていた。

「あなたの結婚式のドレスを見ていたんだよ」

「あたしの結婚式？」

「いや、だからあんたのパパの結婚式に来ていくドレスだよ」

「ああ、それね。ママも行くんでしょう？」

「私はいかないよ」

「どうして？招待状が来てたじゃない」

「でも、今の私には全く関係のない事だからね」

「じゃあ、あたしにも関係のない事だわ」

「あんたには関係あるさ。あんたのパパの結婚式なんだから」

「そうかもしれないけど、一人で行くのは嫌だわ。知っている人もいないし」

「そんな事、言わないおくれ。きつとあんた位の年頃の子だっているさ。それに、ほら、従妹だっけと行くとと思うよ」

「そうかしら」

パパのお姉さんの子どもは確かに、私よりも一つ年上だった。その従妹は来るかどうかわからなし、何となく好きではなかった。

「これ、見て。結構素敵なおドレスがいっぱい載っているじゃないか？」

「でも、こんなの、高いし、いいわ、私」

「その位出すからさ」

「いいって、もったいないわ」

パパから電話があったのは、私達が夕食の支度をしている時だった。

「もしもし。いったい何の用？」

ママの引きつったような声が聞こえてきたので、私は野菜をソテーする手を止めて、火を消した。

「ああ、そうですか。わかりました。ご親切に。エメラルドにも伝えておきますよ。ありがとう。ではさようなら」

「ママ、いったい誰？」

私はエプロンで手を拭きながら、ママのいる居間まで言った。

ママはまだ電話の受話器を握りしめていた。

「あんたのパパだよ」

「パパが何だっけ？」

「パパの彼女がね、あんたのドレスをもう用意してあるだそうだよ」

「そう。良かったじゃない。買わなくてすんで」

「まあ、そうだけどね」

「どうしたの、ママ、何をそんなに気にしているの？」

「気にしてなんかいないさ」

「じゃあ、何？」

今度はママはソファーに座った。その隣に私も座った。

「ただ、あんたのドレス位、いつだって買ってあげられたらいいのになって思ってる」

「そんなのいいのに。何を気にしてるの？多分パパの彼女だって、自分の好みの服を私に着せたいだけなのよ。自分が一番引き立つように色々計算しているんじゃないの？」

「あんたも結構言うね」

「そりゃ、女同士ですもの。相手の考えそんな事ぐらいわかるわ」

「まあ、あんたの言う通りかもしれない。でも、私ももうちょっと手に職か何かを持っていたらね。それに、心臓ももうちょっと強かったら、働きに出て、お金にも苦労しなくても済むんだけどね」

「いいじゃない、今はパパが私たちにちゃんとお金を送ってくれるんだから。私が働くようになっていたら、自分でドレス位、買うわ」

「そうかい」

もう、何べんも何十回も繰り返した会話だった。ママは、自分が働いていない事にコンプレックスを持っている。それでいて、働くに行くのは抵抗があるみたいだった。でも、体も随分重たいし、確かに難しいようにも見えた。

私たちはソテーした野菜とソテーしたチキンを黙って食べた。ナイフやフォークがお皿にあたる音だけが響いた。

日曜日の午前中はママは一人で教会に行った。一週間の中でママが一番生き生きとしている日だった。教会の友達と顔を合わせておしゃべりをするのがとても楽しいみたいだった。私は教会には行かない。行かないと本当はシスターに怒られるのだけれども、最近は行っていない。

自分の部屋のベッドの上で寝ころがって音楽を聴いていた。

『ドンドン』

玄関のドアを強く叩く音が聞こえた。私はステレオのボリュームを下げると、叫びながら、玄関に向かった。

「誰？」

「私よ」

それはミーシャの声だった。

「何だ、あなただったの」

「さっきから、何回も叩いたのに、全然聞こえていないみたいだったから」

「ごめん。中に入って」

「うん。あなたのママは教会？」

「そうよ」

「そうだと思った」

「座って、今お茶でも入れるから」

「良かった。クッキー持ってきたのよ、家で作った」

ミーシャは台所で手袋とマフラーを脱ぎながら言った。

「へえ、そうなんだ。あなた作ったの？」

「まさか。おばあちゃんに決まってるじゃない」

「そう。あなたも作ったら」

「うん、まあ、そのうちにね」

私はクッキーを乗せる皿を出した。ミーシャは黙ってその上に持ってきたクッキーを並べた。焼きたてなのか、甘い匂いがした。

「どうかしたの？」

「どうもしないから来たのよ」

「そう。みんなは？教会に行ったの？」

「行ってないわ。おばあちゃんは、ほら、膝が痛いからもう行けないって言っているし、パパは何で知らないけど、家にいるわ」

「ふーん。でもおばあちゃんをどこかに連れて行ってあげたらいいのに」

「いいの。きのうはずーっとおばあちゃんと一緒に家の用事をしていたんだから。今日位、好きな事したいの」

「まあね」

きのうは、アナイスと一緒にクリニックに行った事を思い出した。

「で、それからどうなったのか、聞いてくれないの？」

「ああ、もしかして、ラブレターの事？じゃあ、それからどうなったの？渡せたの？」

「それが、渡せてないのよ。変なの。絶対渡そうって決心したとたん、会わなくなっちゃって。おまけにラブレターもカバンの中でくしゃくしゃになっちゃって。もう、渡せないわ」

「じゃあ、書き直すの？」

「でも会わないじゃねー」

「そうか。じゃあ、書いても仕方ないね」

「何かひどい言い方ね」

私は紅茶をカップに注いだ。分厚くって、落としても割れそうにないやつだった。

「あ、見て。もうクッキーこんなに食べちゃった。こんなつもりじゃなかったのに。少しだけ食べて、後はエメラルドのママにあげるつもりだったのに」

「大丈夫。私も食べてるから」

「今日はダイエットしなきゃ。今日はもう、リンゴしか食べない」

「それ、本当？」

「多分」

今度は声が小さくなった。

「ねえ、私にも音楽を聞かせてよ」

ミーシャは空になったカップを流しに置くと、自分から私の部屋に行った。ステレオをもう一度つけると、音量を大きくした。

私は残りのクッキーを戸棚にしまうと、紅茶のカップとポットを洗った。

「ねえ、エメラルドは誰もいないの？」

「誰もって？」

「わかっているくせに」

「そうね」

私はミーシャと一緒にベッドに横になった。

「実はちょっと気になっている人がいるの」

「誰？あの自転車の人？」

「そう。どうしてわかったの？」

「だって、その人しかないじゃない。後は学校と家だけでしょう」

「うん」

私はくすりと笑った。

「何、その笑い方。すごく女っぽかったわよ。どうしちゃったの、急に。何か私に隠しているんじゃないの？」

「隠してなんかないわよ。ただ、あの人、ルネに、声をかけられただけ」

「そう。それでもう名前も知っているわけ」

「名前位、いいじゃない。その位知ってるわよ」

「それで、どこまで行ったの？」

「どこまでも行ってないってば」

「そーう？私に隠してるんじゃない」

「隠してないって。何かあったら言うわよ」

「約束よ」

「うん、約束する」

「でも、そのルネは高校生じゃないわよね」

「そこまで聞かなかったけど、違うと思う」

「そうよね。多分大学生か、それとも働いているとか」

「あんな自転車に乗って？」

「そら、どんな自転車に乗ってたって仕事さえしたらいいんじゃないの」

「そう」

仕事をしている人というと、どちらかとゆうと、ミーシャのお父さんみたいに疲れた顔をして、とぼとぼ歩いて仕事に出かけるイメージがあるので、意外だった。でも、世の中には色んな人があるんだと思う。

「会う約束はしたの？」

「ううん、全然」

私は首を横に振った。

「そう」

「ミーシャこそ、ラブレターどうするの？」

「やっぱり書き直すわ。せっかくだから。どうなるかわからないけど、自分の気持ちは気持ちだから」

「そうね。応援しているわ」

「ありがとう」

私たちはベッドの上に横たわりながら、学校の事、進路の事、ファッションの事、クラス

メートの事など、とりとめもなく話し続けた。

「もうそろそろ帰るわ」

ミーシャが突然立ち上がった。

「そう。お昼は？もうすぐママも帰ってくると思うけど」

「ううん、もうクッキーでお腹いっぱいだからいい。それにダイエットしなきゃ」

「そうだったわね」

肉付きのいいミーシャの後ろ姿を見送った。

ミーシャが帰ってから、私は台所でサンドイッチを作り始めた。パンにチーズとレタスを挟んだだけの。

「エメラルド、私よ」

ママが教会から帰ってきた。紙袋のすれ合う音がする。

「お腹すいているだろうと思って、お昼買ってきたわよ」

「えっ、今私作ったのに」

「そう？それは悪かったね」

ママは私の作ったチーズサンドを見た。

「そう、でも、私の買ってきたのはピタサンドだからね。ちょっと違うから、いいんじゃない」

「いいんじゃないって」

「食べ切れなかったら、晩ごはんにしたらいじゃないか」

「まあ」

「で、ママ、教会はどうだったの？」

「相変わらずだよ。お前も来たらしいのに。よその家の子どもは来ているよ」

「そんな、みんながみんなじゃないでしょう」

「さあ、どうだか」

ママの話を聞いていると、みんな孝行息子や娘は教会に親と一緒にいるみたいに見える。でも、そうでないのは知っている。

それに、他の子どもが来ていたからって、私には関係のない事だった。

「そうだ、ミーシャが来ていたのよ。おばあちゃんが焼いたクッキーを持ってきてくれて」

私は戸棚に入れてあったクッキーをママに見せた。

「ああ、そうかい。一緒に昼ごはん食べていったらよかったのに」

「うん」

電話が鳴った。今度は私が出た。

「もしもし」

「もしもし」

知らない女の人の声だった。私は相手が何か言うのを待った。

「エメラルド？」

「はい」

「ごめんなさい、突然電話して。私、フローラ」

そんな名前の人は知らなかった。

「あなたのパパの・・・」

「ああ、わかりました」

「ごめんなさい、びっくりしたでしょう」

「いえ」

「今度の結婚式に着るドレスの事で電話したの。来てくれるんでしょう？」

「はい。でも、ママは行かないっていています」

「良かった、来てくれるのね」

「はい」

ママの事はどうでもいいみたいだった。

「パパから聞いて貰っていると思うけど、あなたのドレスを用意しているのよ」

「はい」

「でも、結婚式の前までには試着をして欲しいの。いきなりだったら不安だから」

「はい」

「来てくれるかしら？」

「はい」

「明日の夕方、学校が終わってからだったら、大丈夫かしら」

「はい」

「良かった。じゃあ、待っているわ」

約束の場所を告げると、電話は一方的に切れた。

「随分長い事話していたみたいだけど、誰だい？」

ママが心配そうに私を見た。

「フローラ。パパの彼女よ。ドレスの事で電話してくれたの」

「ああ、そうかい」

ママはそれ以上はもう何も聞きたくない、というような仕草をした。

月曜日はいい天気だった。

アナイスはあれから私に話しかけてこなかった。私がずっとミーシャと一緒にだったのもあるかもしれない。でも、何となく、私の事を避けているような気もした。

「私ってうまく利用されたのかしら」

そんな考えも頭の中を少しかすめた。それでも、なんとなく、話にくく思っているのかもしれない。

「また、話かけたくなったらそうするでしょう」

あまり深く考えないようにした。

フローラとは街の中心にあるブティックで会う約束をしていた。勿論行くのは初めてだった。

「どこかしら」

私はきのう、電話で書き取ったメモを手に大通りを歩いた。お花屋さんがあつて、豪華なお花がいっぱいある。

「お嬢さん、花はどうかね」

店先にある花の香りを嗅いでいると、店の中から太ったおじさんが出てきた。

「いえ、ごめんなさい。その、いい匂いがするなって思つて・・・」

「なんだ、あの教会の隣にある学校の生徒さんだね」

おじさんは何を思ったか、小さい花を一本バケツから取り出すと、短く切つて、私の制服の胸のポケットに入れた。

「ありがとう。でも、いいでんすか？」

「ああ、少し小さいヤツだからな。あまり寄り道せずには帰るんだぞ」

「はい」

私は笑顔で答えると、また、歩きだした。

ブティックはそのすぐ先にあつた。店先に小さな看板が出ていた。うっかりすると見落と

すぐらいの大きさだった。

「こんにちわ」

私は扉を押しながら、小さな声で言った。扉についていた小さな鐘が音を立てた。

「エメラルド、よく来てくれたわね」

茶色の髪の毛をした、背の高い女の人が、私の事を抱きしめた。

「フローラ？」

「そう、私がフローラよ。よろしく」

「よろしく」

私は恥ずかしくなって下を見た。

「あなたは私が思っていたとおりのかわいい女の子だわ。結婚式に来てくれるのを楽しみにしているのよ」

店の奥から、別の女の人が出てきた。全身黒い服を着て、髪の毛を頭の上で結び上げていた。

「この子がエメラルドよ。今度、義理の娘になるの。ああ、娘だなんて変なの。私たち、そんなに変わらないのに」

私はフローラの顔を見た。私にとって彼女は大人で随分年上に見えた。

「ようこそ。あなたのドレスはご用意させていただいております」

「そうそう、ドレス。一応、この位かなって思うサイズのはとっておいて貰っているんだけど、どうかしら」

「どうぞご試着下さい」

私は試着室に入って制服を脱いだ。下着はもう大人と同じだ。私は試着室の前で、下着姿の自分を改めて見た。

「どう、着れた？」

勝手に試着室のドアが開いて、フローラが入ってきた。

「あ、ごめんなさい」

鏡の中の下着姿の私に彼女が謝った。

「いえ、今着ます」

私はすぐにドレスを来てみせた。

「まあ、ぴったりじゃない。私の思っていた通りだわ。さあ、外に出て、お店の人にも見てもらわなきゃ」

「どう、この子、とっても愛らしいと思わない？」

「ええ、本当に素敵です」

お店の人も笑顔で言った。それが、どれだけがお世辞で、どれだけが本心なのか、私にはわからなかった。

「少し、見頃が緩いようですけれど、いかがしますか？」

「本当。高校生って本当に細いのねー」

フローラが感心したように言った。

「あ、別にこのままでいいです」

「そうでございますか？」

お店の人は少し離れて私の姿を見た。

「やはり少し緩いようですから、少しだけ、お直しいたします。やはり体にある程度フィットしませんと、美しくありませんから」

「はあ」

よくわからなかったけど、直して貰う事にした。

「良かった、それにしても。全然合わなかったら、どうしようかって思っていたのよ。あなたのパパも、あなたのドレス姿を見たら喜ぶと思うわ」

私は顔が少し赤くなった。パパとはしばらく会っていない。

私はもう一度試着室に入ると、もう一度制服を着た。

試着室を出ると、フローラとお店の人が話をしていた。

「制服を着ていると、また全然別人に見えるわね」

「でも、制服は制服で別の魅力があるようですよ」

「そうなのかしら。私は高校の頃、制服なかったからね」

フローラは私の方を向いて言った。

「今日はどうもありがとう。もし良かったら、お茶でもどう？この先に、おいしいケーキが置いてあるカフェがあるのよ」

「あ、いいです。もう、遅くなるから」

「そう？じゃあ、次の機会には是非一緒に行きましょう」

「はい」

私は彼女を店に置いて、一人で外に出た。

もう外は暗くなりかけていた。

「早く帰らなきゃ」

私は早足になった。ここから家までは結構距離がある。一人でソファーに座っているママの姿が目に見えかんだ。

どれ位歩いたろうか。もう大通りははずれて、少し寂しい道に入った。

「やあ」

男の人の声に心臓が止まりそうになった。

おそろおそろ振り返ると、まず、自転車が目に入った。

「この間の・・・」

「今日は遅いんだね」

「はい」

先日の人だった。

「もう暗いから、送っていくよ」

「でも、自転車に乗っているのに悪いです、そんな」

「いいさ、時間ならたつぷりある」

「ありがとう」

私たちは歩き始めた。でも、何を話しているのかわからない。しばらくの間無言だった。

「僕は、君の家よりまだ坂の上に住んでいるんだ」

「はい」

「だから、朝は自転車で行くのが早いんだ」

「でも、それだったら、帰りが大変ですね」

「もう、慣れたよ」

「そうですか」

「一人で暮らしているんだ」

それには私は返事をしなかった。

「街のデザイン事務所でちゃんと仕事をしているよ。怪しい人間ではないつもりだけれども」

「デザイン事務所？」

「そう。だいたい宣伝用のパンフレットを作ったりしているんだ」

「そうなんですか」

そんな仕事があるなんて考えもしなかった。

「良かったら、一度遊びに来ないか？」

それにも返事をしなかった。

「君はまだ高校生だったね」

私は黙って頷いた。

「ボーイフレンドとかいるの？」

「いえ、女子校ですから」

「そう」

それっきり会話はなかった。

私のアバルトマンの前に来ると、彼は自転車にまたがった。

「じゃあ、また」

「さようなら」

朝、いつものように坂道を下がっていると、先の方にミーシャが立っているのが見えた。

「お早う」

私は後ろから声をかけた。しかし、返事はない。

「どうしたの、ミーシャ」

ミーシャの足元に涙が落ちた。

「泣いているの？」

「エメラルド！」

急にミーシャは私にしがみつくと、大声で泣きだした。

「どうしたの？」

「あの、茶色のコートの人」

「茶色のコートの人がどうしたの？」

「今朝、女の人と歩いてた」

「それがどうしたの？」

「どうしたのって、決まってるじゃない。二人で夜を一緒に過ごしたのよ」

「そんなのわからないじゃない。たまたま近所の人にあって一緒に歩いているのかもしれないしさ」

「違うわ。絶対に違う！」

「そう？」

「だって、二人で時々見つめ合ったりしているのよ。誰が見たって二人は恋人同士だわ」
「そうなの？」

それだったら仕方ないのかもしれない。

「きっと二人は濃厚な夜を二人で過ごしたのよ」

「濃厚な夜ってね」

いったいそれがどんな物なのか、ミーシャだって私だって知っているわけではなかった。ただ単に想像してみるだけなのだ。

「許せない」

ミーシャの手には、あのピンク色の封筒が握りしめられていた。

「それ、書き直したんだ」

「そうよ。昨日の晩、文章も考え直して、必死で書いたのよ」

「そう、残念だったわね」

「エメラルド」

また、思い出したように、ミーシャは大きな声で泣いた。

「仕方ないじゃない。さあ、もう学校に行こうよ」

「うん」

自転車が通りすぎたのには気がつかなかった。

私は手袋を取ると、素手でミーシャの頬に流れる涙をぬぐった。

ドレスが届いたのは、それから何日かしてからのことだった。

学校から帰って来ると、ママが大急ぎで玄関まで来て、私に言った。

「届いているよ」

「届いているって、何の事？」

「ドレスだよ。あんたの」

「ドレス？」

私は急いで居間にいった。それはソファの上に広げられていた。

「きれいなドレスだね。きっと高かったんだらうね」

ママは、パパの恋人に対しての気持ちよりも、今はこのドレスの美しさに圧倒されているようだった。

「早く、これ、着てみておくれよ」

「今？だって、私お店で着ただけど」

「でも、私は見ていないんだからさ」

「仕方ないわね」

私は学校の荷物をそこに置くと、手袋を取り、マフラーを取った。そして、制服を脱ぎ始めた。

「本当にぴったりじゃないか。まるで誂えたみたいだ」

「少し直してくれたみたいだけど」

「どこを？」

「身頃のところらへんを」

「どれどれ」

ママは近寄って、私のドレスの縫い目をじっと見た。

「どこを直したか、全然わからないよ」

「当然でしょ。お店でやってもらったんだから」

「ちよっとそこに立っておくれ」

ママは私を窓際に立たせた。

「きれいだ。女の子らしい、とっても素敵なドレスだね。そうだ、写真に撮っておかなきゃ」

「やめて、ママ。今撮らなくってもいいじゃない。どうせ、結婚式の時には、誰かがいっぱい撮ってくれるって」

「そうかい」

ママは残念そうな顔をした。

『トントン』

誰かがドアを叩く音がした。

「誰だろうね」

ママが玄関に出た。

「あんたの友達だよ」

「私の友達？」

ミーシャとはさっき別れたばかりだった。

「アナイス」

私はびっくりした。

「どうしたの？何で私のうちに？」

「ごめんなさい、突然で。でも、学校では話しにくかったから」

「そうなの。わかったわ。ちよつとここで待っていて。着替えてくるから」

私は脱ぎ捨てた制服と手袋とマフラーを持って自分の部屋に行った。

その間、居間からは何の話し声もしなかった。ママとアナイスが黙ったまま、居間で立っている姿が目に見えなかった。

「お待たせ。良かったら、私の部屋に入って」

「ええ」

アナイスはママに軽く会釈をすると、私の部屋に入った。

「運転手は？」

「いるわ、車の中に」

「待たせておいていいの？」

「いいのよ、仕事なんだから。それに、私、道がわからなくなりそうだったから」
「そう」

私はドレスをクローゼットにしまった。

「きれいなドレスね」

「ええ、今度、パパの結婚式があるの。それに着ていくドレスよ」

「あなたのパパの結婚式？」

少し不思議そうな顔だった。

「ええ」

「そうなんだ」

少しあきらめたような顔になった。それ以上追求して聞くつもりはなかったらしい。

「それで話ってなに？」

「話？」

「だって、話をしに来たんじゃないの。わざわざ私の家に」

「ええ」

「あなたの家のような豪華な家ではないけれど」

「いいのよ、そんな。あなたの家の方が居心地がいいわ」

「そうかしら？」

ママと二人暮らしたかったけれど。

「あれから大丈夫？」

「何が？」

「病院行ってからよ」

「ああ、あれ」

しばらく沈黙が流れた。

「ごめん、その事については今、話したくないの」

「そう」

「ごめんなさい。でも、いつか、きっとお話するわ。時期がきたら」

「わかった」

「私はあなたとお友達になりたいの」

「友達？」

「ええ、こんな事、改まって言うような事ではないのかもしれないけど。でも、あなたはいつも友達と一緒にだから」

「ミーシャの事？」

「ええ、だから、あなたをミーシャから取り上げようとか、そんなつもりはないの。ただ、私とも友達になった欲しいの」

「勿論よ。いつでも遊びに来て、よかったら。でもあなたの家から遠いかしら」

「大丈夫。それに、あなたも私の家にまた遊びに来て欲しいわ」

「ありがとう」

また沈黙が流れた。友達とは言っても何を話していいのか良くわからなかった。

「そうだ、良かったら晩ごはん、一緒に食べない？ご馳走じゃないけど」

「ううん、でもありがとう。運転手を待たせているからもう帰るわ」

「ああ、そうだったわね。忘れていたわ。じゃあ、今度ね」

「ありがとう」

アナイスはそう言うと、ベッドから立ち上がった。

部屋から出ようとして、彼女は振り返った。

「そうだ。さっきのドレスとても素敵だったわ。あなたに似合っている」

「ありがとう」

「どういたしまして」

彼女が家を出てから、私は自分の部屋のカーテンをめくって、彼女が黒塗りの車に乗り込

むのを見ていた。

もう、あたりはうす暗くなっていた。

次の日の朝、アパルトマンの扉を開けた私はびっくりした。

道の反対側に自転車に乗ったルネがいたからだった。

「お早うエメラルド」

「お早うルネ」

「名前覚えてくれていたんだね」

「あなたこそ」

「今度の土曜日、あいてる？」

「さあ」

私は歩きだした。ルネも自転車を押しながら歩きだした。ミーシャがやって来る道はまだ少し先だった。

「あいていないの？」

「ママと食料品の買い物に行かないといけないのよ」

「じゃあ、それが終わったら。どう？あいている？」

「ええ、まあ」

「そう良かった。じゃあ、僕の家はここに書いてあるから」

彼は住所の書いてある小さな紙片を私に押し付けた。

私はその紙片を見た。本当に住所しか書いていなかった。それを胸のポケットに入れた。

「お早うエメラルド」

「お早うミーシャ」

ミーシャはもうすっかり元気になっていた。

茶色のコートの人のはすっかり忘れてしまったようだった。

私はミーシャにポケットの中にある紙切れの事を言おうかどうか迷っていた。

それからアナイスの事も思いました。アナイスが私の家を訪ねてきた、と言ったら、きっとびっくりするだろう。

「あなたのパパの結婚式って今度の日曜日なんでしょう？」

「そうよ」

「ママは行くの？」

「私のママ？いえ、いかないわ」

「そうなの。ちょっと寂しいわよね。ママにはいい人いないの？」

「いないわ」

「そう。私、時々思うんだけど、あなたのママと私のパパが結婚したらいいなって。そして私たちが姉妹になれるのよ」

「姉妹？それもいいけど・・・」

「いいけど・・・」

「なんだか想像できない。あなたのパパと私のママがなんて」

「そう？」

少しミーシャは不満そうだった。

「ごめんなさい。あなたのパパがどうっていうワケじゃなくって、ママが男の人とデートしたりする姿が想像できないのよ」

「でも、昔はあなたのパパとデートしていたワケでしょう？」

「そうだけど」

「また、しばらくしたら、誰かとデートする気持ちになるんじゃない？」

「そんな物かしら？」

「もしかして、あなた、ママを誰にもとられたくないんじゃないの？」

「えー、そんなー。それだったら、ミーシャ、あなたはどなの？パパが誰か別の女の人と結婚してもいいの？」

「私は大丈夫よ、全然」

「そう？」

「うん」

いつの間にか学校の前まで私たちは来ていた。また、何台か車が学校の前に止まって、生徒達が降りていった。

一人の後ろ姿は、明らかに、アナイスだった。けれど、私はあえて声はかけなかった。

「明日はどうしよう？」

一日中、私はそんな事ばかりを考えていた。授業も聞いているつもりなのだけど、すぐにまた、ルネの顔が頭に浮かんだ。ルネが好きだとかそんな気持ちはまだない。それでも、男の人と一緒にいるってどんな感じなのか、知りたいような気もした。

クラスには、そういう点では経験豊富そうな子達もいる。でも、格段仲がいいわけでもな

いし、急にそんな質問をしたら、かえって怪しまれるだけかもしれない。

今日は昼からシスター達と老人ホームを訪問する事になっている。そして、色々用事をするのだ。

私はシスターから渡された白いエプロンをつけた。レースがついていて、変な感じだ。今どきはやらない。

教会の裏の道を枯れ葉を踏みながらしばらく歩くと、そこに老人ホームがあった。ここも教会が経営している。

「こんにちわ」

「こんにちわ」

私たちは口々に言った。

「こんにちわ、お嬢さん達」

中から、自身も老人ホームの住民でもちっともおかしくなさそうな、女性の館長が出てきた。

「みんなあなた方の事を待っていましたよ。どうぞお入りなさい」

館長が手招きした。

私たちはそれぞれペアになって、ホームの部屋を訪ねた。私はいつものようにミーシャと一緒にだった。

「こんにちわ」

私たちは大きな声で言った。

「どうぞ」

中からしわがれた声が聞こえた。いつも老人ホームに来ると思うのだ。いつか自分もこんな声を出すようになるのかと。

中には髪の毛をきれいに切りそろえた、老女がいた。ベッドの上で弱々しく私たちに向かって手を挙げていた。

「こんにちわ。何か御用はありますか？」

「ありがとうあなた達。でも、用は何もないのよ、本当に」

リスのようなくりくりした目でその人は言った。目だけはつぶらで童女のようなだけけれど、その周りにはいっぱいシワが刻まれていた。

「じゃあ、少しお掃除しますね」

「ありがとう」

いつも老人ホームのスタッフが掃除をしているに決まっているけれど、さらにもっと部屋をきれいにしてあげるのが好きだった。

私たちは窓を開けると、床を掃いたり、筆筒の上を拭いたり、電気の傘の埃をはいたりした。

「ありがとうね、いつも。とつても気持ちが悪くなったよ」

老女はゆっくりと足をベッドの下に下ろした。

「大丈夫ですか？何か取りたい物があるんですか？」

「ああ、いいんだよ、いつも自分で取っているんだから」

「でも、今は私たちがいるんだから、言ってみて下さい」

「そうかい、じゃあ、すまないけれど、その机の引き出しに入っている本を取ってくれないかい？」

「本？ちょっと待って下さい」

私がおその人を押さえている間に、ミーシャが本を引き出しから取り出して、渡した。

「ありがとう」

老女は受け取った本を胸の前で強く握りしめた。

「それ、何の本ですか？」

ミーシャが聞いた。

「これかい？これはね」

老女は窓から外を見た。外の景色よりもっとと遠くを見ているような眼差しだった。

「これは好きだった人がプレゼントしてくれた本なんだよ。毎日、一回はこの本を開くようにしているんだ」

「好きだった人って、ご主人ですか？」

ミーシャが何気なく聞いた。

「残念ながら、違うんだよ。できたら結婚したかった。でも、その人は死んでしまったんだよ、戦争で」

「戦争！」

ミーシャと私は目を合わせた。いったいいつの話をしているんだろう。歴史の教科書に出ているだろうか。ミーシャは首を振った。

歌うような声で老女は本を朗読し始めた。多分今までに何十回、何百回も朗読しているに違いない。

私たちはそつとその部屋を出た。

廊下を歩きながら私たちは小声で話した。

「何か変だよ。わざわざ私たちの前で、朗読するなんて。自分には恋人がいた、って言いただけなんじゃないの？」

「そうかもしれないけど、でもずっと昔の事でしょう。そんな長い事一人の人を思い続けていられる物なのかしら？」

「私はダメ。すぐに次の人を見つけるわ」

「ふふ」

何だか可笑しくなった。

「あら、何で笑ってるの？」

「ごめん、でもミーシャらしいと思って」

「悪かったわね」

土曜日は朝から小雨が降っていた。だから、ママと一緒にスーパーマーケットに出かけた。私がカートを押す係だった。

「雨だから、あんまり沢山は買えないね」

「そうね」

本当に傘をさして歩くのはあまり好きではなかった。けれど、土曜日にママと出かけるのが習慣になっている。

「今日の分だけ買って、どこかにお昼でも食べにいこうか」

「うん。でも、せめて明日の分ぐらい、買わなくてもいいのかしら？」

「いいよ、あしたはどうせお前は結婚式だろう。どうせご馳走をいただくんだらうから」

「ママはどうするの？」

「そうだね、どこか素敵なレストランでも行こうかね」

「そう」

ママが一人でレストランに行っている姿は想像できなかった。

「私の事はいいからさ。今日は何を食べたい？」

「そうね、軽くでいいわ」

「そうかい」

買い物の後、私たちは、同じ通りにあるハンバーガーショップに入った。ママと私はチー

ズバーガーを注文した。

「ママ、飲み物は？」

「そうだね、コーヒー」

「そう、私はミルクシェーク」

トレイを持って空いている席まで行った。

私は真っ先にミルクシェークを口にした。

「お前、よくそんな物を飲んで太らないね」

「大丈夫」

「私もそんな時期があったんだけどね。手も足も細くって、フラミンゴの足のようだって言われたんだ」

「フラミンゴの足？変な例えね」

「まあ、そうだけども、実際そう言われたんだから」

「ふーん」

私たちはチーズバーガーを黙って食べた。チェーン店の物よりは、随分大きくて食べ応えがあった。

私は頭の中で考えた。ママの足をフラミンゴの足に例えたのは女の人だったのか、男の人だったのか。

ママの若い頃の写真を見た事がある。確かに今よりは随分細かった。そして写真の中で幸せそうに笑っていた。

けれど、その写真の外でママがどんな風に生活していたか、どんな友達がいて、どんな恋人がいたのか、語ってくれた事もないし、全く想像がつかなかった。

「私がもう少し大人になったら、昔の事を話してくれるのかしら」

そう一瞬思った。

でも、多分、ママは私に何も話したくない、

そんな気がした。

家に帰って、食料品をしまい、部屋の掃除を簡単に済ませると、ママは自分の寝室に入ってしまった。

多分昼寝をしているのだと思う。ママにとって、外に買い物に出かけるのは、大仕事だから。

私は自分の部屋のベッドに寝っころがった。

宿題をやるうと思つたら、する事もできる。でも、まだ土曜日だった。する気にならない。「そうだ」

私は立ち上がつてクローゼットを開けた。そこに学校の制服が吊つてある。その胸ポケットに手をやった。

「あつた」

きのうの朝、ルネに手渡された紙切れがあつた。

それを見ながら、またベッドの上に寝転がった。

今度は窓から外を見た。まだ雨が降っている。

私はコートを着て、傘を手に持つと、ママには何も言わないで、外に出た。

家の前の坂道をさらにあがると、紙片に書かれていたルネの家の住所があつた。

私はルネの部屋のベルを押した。けれど、返事がない。

回りを見回した。

道の反対側を歩く人はいたけど、こちら側には誰もいなかった。

「どうしよう」

もう一度紙片を見た。この住所に違いがない。

もう少しだけ待つ事にした。

建物の扉が開いた。私は傘越しにその人の顔を見た。

髪の毛の薄い、太ったおじさんだった。私は視線を落とした。

おじさんも一瞬だけ私を見ると、そのまま、猫でも見たような顔をして、そのまま傘をさ

して出ていった。

「いないのか」

少しだけがっかりして、坂を下り始めた時だった。

坂の下から見慣れた自転車が見えた。

「やあ、来てくれたんだ」

私は黙って頷いた。

「ごめん、事務所まで書類を取りにいったんだ」

「はい」

「さあ、機嫌を直して」

「別に怒ってなんかいません」

「そう、それだったら良かった」

私はルネと、ルネの自転車と一緒に建物のエレベーターに乗り込んだ。ルネの体から、雨しずくがぼたぼたと落ちた。そして、私の傘からも部屋に入ると、私は真ん中にあるソファアームに座った。

ルネは洗面所に入って、濡れた体を拭いていた。私が自分の位置を少しだけずらすと、ルネの細いけれども筋肉質の上半身が見えた。

彼がこちらを振り返り返りそうになったので、あわてて元の位置に戻った。

「ごめん、待たせて」

彼は、こざっぱりとした、乾いたシャツに着替えて出てきた。

そしてキッチンの冷蔵庫に向かった。

「何か飲む？ コーラ？ ジュース？ それともミルク？」

最後のミルクの部分で幾分かからかうような表情になった。

「あ、いえ、今は別に何も」

「そう、じゃあ、僕は失礼して、コーラを飲むよ。喉が渴いているから」

「はい」

「雨の日はいいんだけど、自転車は不便だな」

私は返事をしなかった。

「どうしたの？ エメラルド。何か言ってる」

ルネは私の反対側の椅子に座って私の顔をじっと見た。

「それとも緊張しているの？」

「いえ」

私は視線を落としたままだった。

「寒いかい？」

「いいえ」

「じゃあ、コートを預かるよ」

彼が手を出した。私は、学校に行くときに着る、鼠色のコートを脱いだ。

中はボートネックのセーターとスカートだった。

彼は黙って私の酷く不細工なコートをクローゼットにしまった。

「何だか大人っぽいね」

「大人っぽい？」

私はルネが私のセーターの胸元を見ているのがわかった。

「いつもは制服だからさ。そうやって普通の服を着ていると、新鮮な感じがするよ」
「新鮮？」

「そう、君はとっても若くって、きれいだって意味だよ」
そう言うと、彼は顔を私の顔のすぐ側に近付けた。

彼が私にキスをしようとしているのはわかった。けれど、本当に初めてだったので、どうしていいかわからなかった。

「ボーイフレンドは本当にいないの？」

彼は聞いた。私は黙って首を横に振った。

「今までキスした事は？」

私はその質問にも首を横に振った。

「じゃあ、僕が教えてあげるよ」

そう言うと、彼の唇をそっと私の唇に合わせた。

それだけでも、体中に電気が走ったような気がした。その上、彼は舌を口の中に入れてきた。

「エメラルド」

唇を合わせながらも彼は言った。

私は彼の呼びかけに答える事が出来なかった。

彼の手が自分の背中をさすってきた。

「だめ」

私は思わず大きな声で叫んだ。

「し、静かに。ここは壁が薄いんだ」

少しだけ、彼は困ったような顔をした。

「ごめん、結構近所の人が口やかましいからさ。でも、君の嫌がる事は絶対しないから」
そう言うと、彼は立ち上がった。

「そうだ、音楽聴く？どんな音楽聴くのかな？」

彼は立ち上がると、返事を待たずにステレオをつけた。そして、すぐに音楽に合わせて体を動かし始めた。

「僕は音楽が大好きさ。ほら、いつも机に向かって仕事をしているだろう。だから、家で仕事をする時には、いつも音楽を聴きながらやっているんだ。その方がリラックスするから」

「家でも仕事をするんですか？」

「ああ、時々場所を変えた方が捗るから」

「そうですか」

「ほら」

そう言うと、彼はカバンの中から書類を取り出した。さっき雨の中で持ち歩いていたにもかかわらず、中身はまったく濡れていなかった。

「これが、今、やっている仕事だよ」

彼は部屋の隅に置いてある仕事用の机の上に、それを広げた。

広告のラフスケッチだった。

「すごい、こんな事をしているんですか。格好いい」

「そんなに格好良くもないんだけどね。まだ経験も浅いし」

「それでも、すごい」

「そうでもないさ」

彼は照れたような顔になった。

「そうだ、おなか空いてないかい？実は僕、結構空いているんだ。事務所まで行ってきたせいか」

「ああ、まあ」

私は自分の胃袋の上に手を置いた。まだ、あの大きなチーズバーガーが消化しきれれてはいない。でも食べれそうだった。

「じゃあ、ピザを注文するよ近所においしいデリバリーのピザ屋があるから」

「はい」

彼はビールを飲みながら、そして、私はコーラを飲みながら、ピザを食べた。ピザは大きくてとても食べきれなかった。

「もう、無理」

満腹して妙に上機嫌になった私は笑いこぼれた。

「こんなに沢山食べれない。なんでこんな大きいのを注文したのかしら？」

「だって、君は若いから、沢山食べるだろうと思ったんだ」

「そんなに食べません」

「エメラルド」

彼が私の顔をじっと見た。

「何？」

「口の横にピザソースが付いている」

「本当？」

私は指で口の周りをなぞった。

「まって、僕が取ってあげる」

そう言うと、ルネは自分の唇を私の口の右上にあてた。

「そんなの無理」

「大丈夫、もうすぐとれるから」

そして、彼の舌は、だんだん私の唇の中に移動してきた。

「ルネ」

「ごめん。早すぎるのはわかっている。でも、もう止められないんだ」

彼の手がすっかり私の体を包み込んでいた。

私は夜、なかなか眠りにつけなかった。明日はパパの結婚式だから、よく寝ておかないといけないのはわかっていた。暗闇の中に部屋の中に吊るしてある、明日着るドレスが見えた。

「もしもし」

どこかから、小さな声が聞こえた。ママの声だった。電話で誰かと話しているみたいだった。

「今何時だろう」

時計を見た。夜中の一時だった。ママは私が眠っていると思っているに違いなかった。

「あした、十一時にいつもの所で」

「十一時・・・」

パパの結婚式が始まる時間だった。

ママは結婚式に行かないで、誰か別の人と会う約束をしている。意外だった。いつの間にか、話し声は聞こえなくなった。私もいつの間にか眠りにおちた。

結婚式の当日は、寒いけれどもいい天気だった。私はママが呼んでくれたタクシーに乗って、教会に行った。

教会につくと、係りの人がさっそく私を花嫁の控え室に案内してくれた。

「お早うございます」

花嫁の後ろ姿が見えた。

「お早う、エメラルド」

パパの彼女が振り返った。ベールをかぶったきれいな花嫁姿だった。ブティックで会った時よりも十歳は若く見えた。でも実は彼女が何歳なのだから私は知らない。

「フローラ、とっても綺麗」

心から感動して私は言った。

「ありがとう。今日は来てくれてありがとう。もうすぐ私たち親子になるのね」

私は黙って頷いた。

「ドレスはどう？コートを脱いで見せて」

私は黙ったまま、例の鼠色のコートを脱いだ。

衣装係の人が物も言わずに寄ってきて、私のドレスをひっぱったり膨らましたりして。そして、髪の毛も直した。

「お化粧しますか？」

衣装係が私の顔とフローラの顔をかわるがわる見た。

「どうするエメラルド？」

私は答えにとまどった。

「じゃあ、ちょっとだけしてあげて。あまり大げさにならないように」

「かしこまりました」

私は鏡の前の小さな椅子に座らされた。そして、衣装係の人のするがままになった。

「できました」

私は鏡を覗きこんだ。なんだか自分ではないような、不思議な感じだった。

「どう？見せて？」

私は立ち上がってフローラの前に行った。

「素敵、エメラルド。もうすっかりレディね。とっても大人っぽく見えるわ」

「ドレスもとてもお似合いです」

衣装係の人が付け加えた。

そして、さらに、フローラのメイクや衣装を直しにかかった。私は控え室から出ると、一人で礼拝堂に向かった。

その途中で花婿姿のパパに会った。

「パパ！」

「エメラルド！素敵じゃないか、そのドレス姿！」

そう言ってパパは私にキスをした。パパの唇が、丁度昨日ルネが私の顔についたピザソースを吸い取った場所にあたった。けれどもそんな事はパパはちっとも知らない。

「エメラルドがいたら、花嫁もかすんで見えるぞ」

「やだ、パパ、そんな事を言ってもいいの？」

「勿論、秘密だ、エメラルド。秘密は守れるね」

「勿論よ」

私はパパに抱きついた。